

編集後記

今年一九九九年は、東京外国語学校が東京高等商業学校（一橋大学の前身）から独立してちょうど百年目に当たる。その意味で、今年には本学にとって意義のある年であり、この『東京外国語大学史』も、その記念事業の一環として刊行するものである。

しかし、東京外国語学校が東京高等商業学校の附属学校として創立されたのは、一八九七（明治三十）年である。そして、本学の歴史においては、分離独立よりもその創立の方がはるかに意義がある。実際、これまでの記念行事は、すべて創立を起点として行われており、たとえば戦前の創立二十五周年記念式典は一九二二（大正十一）年に行われたし、戦後においても、六十周年式典は一九五七（昭和三十二）年に行われており、いずれも、一八九七年を起点として、創立年数を数えていた。しかし、八十周年式典は一九七七（昭和五十二）年には行われずに、一九七九年に行われた。そのためもあってか、本学関係者の間では、創立百周年記念の諸事業は、一九九九年に行われるものともみなされており、本格的な取り組みが遅れた。こうした事情によって、今回は独立百年を区切りとして、記念事業を行うことにした次第である。

しかしながら、創立百年はやはり一九九七年であり、この年こそが記念すべき年であった。将来においては、こうした事業は、再び一八九七年を起点として行われることを希望する。

とは言え、一九九九年もまた、それとは別の意味をもつ年である。東京外国語学校は、戦時下の一九四四（昭和十九）年に校名の変更を余儀なくされ、東京外事専門学校と変えられたが、それが新制の東京外国語大学として新たに

出発したのが一九四九（昭和二十四）年であり、今年はそのから五〇年目に当たるからである。二十一世紀を目前にして、大学がさらなる発展のために、自己変革を迫られている現在にあつて、新制大学として節目の年に、本学の沿革をつぶさに記録した歴史書を編さんすることは意義をもつと言えよう。

しかしながら、本書がはたして、自らの来し方をふりかえり、未来への展望の素材とするに足る内容をもっているかと言え、その編さんにたずさわった者として、内心忸怩たるものを感じざるをえない。率直に言つて、本書の刊行にこぎつけた喜びよりも、反省の方がはるかに多いからである。

本書の刊行を目的とした「東京外国語大学百年史編纂委員会」（現「大学史編纂委員会」）が発足したのは、一九九六年九月二十二日である。しかし、それから刊行予定の独立百年記念式典までには、僅か三年余しかなかったために、十分な準備はできなかった。他大学の場合、相当に長い年月をかけて大学史の編さん事業を進めることが多いのに比べて、十分な時間をとれなかったのは誠に残念である。やや弁解じみた言い方になるが、本書が大学史として、必ずしも意に満たない点があるとすれば、そのことに起因する面の少なくないことをご了解頂きたい。

以下、本書の編さん過程を簡単に記しておくことにする。

当初の一年余は、資料の収集や退官教員・職員・卒業生からの聞き取り、さらには沿革の概要の把握のための報告会など、編纂委員会自体の準備期間に費やされた。しかし、その間に、本書の準段階に当たる、「東京外国語大学略史」を本学の創立百周年記念式典の日の一九九七年四月二十二日に出すことができた。

本格的な「大学史」の編さんに入ったのは、二年目に入ってからである。まず編さんの基本として、ほぼ次のよう

なことが決められた。

一 全体の構成は、本文編一冊、資料編とする。
二 本文編に関しては、次のようなものとする。

1 一九九九年十一月に予定されている独立百周年記念式典までに刊行する。

2 全体を通史編と各論（個別史）に分け、通史編では新外語の創立以後だけでなく、江戸時代の前史および旧外語についても含める。

3 それぞれの内容は、分担執筆者および執筆責任者に任せる。

4 文体や構成は、できるだけ多くの方に読んで頂くために、学術論文的なスタイルはさけて、リーダーブルなものとする。

三 資料編については、次のようなものとする。

1 本学の歴史にかかわる資料を出来る限り多く収録する。

2 巻数は上・下二冊を予定とする。

その後、何度かの討論を経て、本文編の全体の構成およびその執筆要項を決定した。同時に、分担の執筆者および執筆責任者を決めて、執筆を依頼し、全員から快諾を得ることができたので、一九九八年一月には、原稿執筆の依頼状を出した。ただし、刊行時が決まっていたために、執筆者の方には、ご無理をお掛けすることを承知しつつも、原稿の締め切りを一九九八年八月末日とせざるをえなかった。

三年目の一九九八年九月からは、本来ならば、集まった原稿に基づき、編集作業に入るはずであったが、案の定、

提出期日までに送られた原稿はきわめて少なかった。そのために、構成全体の概要をつかめずに、編集作業は大幅に遅れることになった。

また、単行本としての形式をとるために、編集委員会としては、最も一般的な方式に準拠して執筆要項を作り、サンプル原稿をも同時に送付したにもかかわらず、それに基づいて書かれていた原稿は少なく、あたかも本学の現状を象徴していくかの如くに、極めて多種多形の形式のものが集まった。そのために、全体の形式を整えるための作業部会（稲田、渡辺、寺崎、中嶋〈幹〉、伊藤、吉田）は、多大の労苦と時間とを費やすことになった。

各部分の内容も、執筆者に一任したためにさまざまであり、とりわけ個別史では非常に多様なものとなった。しかし、内容については、執筆者の意向を尊重して、ごく一部を除いて、表記上の統一にかかわる部分に手を入れるだけにとどめた。そのため、全体のページ数は、当初の予定の約二倍となったが、基本的にはそのすべてを収録することにした。

編纂委員会としては、このような事情の下にありながらも、期限内の刊行をめざして、最大限の努力をした積もりである。編纂委員会の開催だけでも、三年間に約三〇回に及んだ。もちろん、本書に種々の不備があることを率直に認めざるをえない。ただ、それらの点に関しては、繰り返しになるが、きわめて短期間のうちに、これだけの内容の本書を刊行せざるをえなかった事情に鑑みて、ご海容を頂くほかはない。

しかしながら、今回の大学史の編さん過程で明らかとなったことは少なくない。すなわち、これまで本学の沿革の中であいまいであった部分を明確にしたり、間違っていた事実を糺すことができたのである。たとえば、旧来、本学の起源は一六八四（貞亨元）年の江戸幕府による天文方てんもんがたの設置であるとされてきた。しかし、天文方というのは、洋

一書の翻訳をも業務の一つとはするものの暦の作成を主たる任務とする役職の名前であり、組織や機関ではない。日本における外国語に関する本格的な研究・教育機関の出発は、それよりずっと遅く一八五七（安政四）年になって置かれた蕃所調所である。それがその後、幕末・明治初期にかけて何度かの変遷を経て、一八七三（明治六）年の東京外国語学校の設立に至るのである。したがって、本書では、本学の組織としての正式な起源を一八五七年の蕃所調所としている。また、旧外語の前身に当たる部分については、本学の諸パンフレットに書かれていた旧来の沿革図に、いくつかの誤りがあったが、事実がただされて、近年のものでは正確なものが載せられるようになったものもいくつかある。これらの点に関しては、前史の部分をお読み頂ければ幸いである。

さらにこれまでは旧東京外国語学校は、一八八五（明治十八）年に、東京商業学校に吸収合併されて廃校になったと言われてきた。しかし当時の史料を忠実に読む限りでは、同年九月に、東京外国語学校、同校所属高等商業学校、東京商業学校の三校が対等な形で合併されて東京商業学校となったこと、そして翌年二月、同校の語学部が高等部とともに廃止されるものの、約半年間は旧外語に当たる部分が存続していたという事実が、改めて確認された。この点についても、詳しくは通史の第一編をご覧頂きたい。

そのほか通史編では、単なる本学の変遷だけではなく、近代日本の資門・高等教育史の中での本学の位置を明確にすることに力点を置いた叙述がとられたし、また、個別史に関しては、それぞれのユニットの出版と現在との関係が時系列的に明らかにされたことによって、その意義と重みとが改めて認識されることになろう。

本書の編さんにあたり、多くの方がたの協力を得た。本来ならば、氏名を挙げてお礼を申し上げるべきところであ

るが、省略させて頂くことをお許し願いたい。

今回の編さん作業を通じて、率直に言って、本学の保存資料の質的・量的な貧しさを実感した。そのために、国会図書館や東京大学・一橋大学をはじめ他大学の図書館などに出かけていくこともしばしばであった。特に戦前の通史編に関しては、それらの諸機関に所蔵されている資史料がなければ、本書の執筆は不可能であつたろう。今後は、本学においても、できるだけ多くの資料を保存・収集するとともに、欧米の大学に見られるようなユニヴァーシティ・ミュージアムが早急に造られることを希望する。

ともかくも、予定通りに、本書を出すことのできたことは、われわれの喜びとするところである。それを可能にしたのは、執筆者の方がたのご協力と教務補佐の人たちのご努力の結果であり、さらに印刷期間が短かつたにもかかわらずに、さまざまなご無理をきいて頂いた藤原印刷のおかげである。改めてお礼を申し上げたい。

その中であつて、特に本学大学史編纂資料室の山本唯雄氏には、多大のご尽力を頂いた。氏は、長らく本学教務課に勤められ、本学の戦後史のまさに生き字引ともいうべき方であるばかりでなく、戦前からの資史料類に通じておられる方である。御退職後の身でありながらも、編さん事務の統轄者としてお仕事を引き受けて下さり、教務補佐の方たちをリードして下さるとともに、執筆者の方がたからのさまざまな疑問に対して的確な回答をして頂き、時として身勝手な要求に対しても丁寧に対応して頂いた。また、教務補佐の仕事は、主として本学の大学院生の方たちに引き受けて頂いたが、全員、本書の刊行をめざして精力的に取り組んで頂いた。特に、巻末の年表を担当した梅津紀雄氏には、たくさんのデータの中から必要な事項を拾い出すという煩瑣な作業をお願いした。記して感謝の念を表したい。

本学には、これまで自らの沿革を体系的に記録した歴史書が存在しなかった。したがって、本書は本学の最初の正史といえることができる。

日本の大学は、今日、かつてないほど大きな転機にさしかかっており、変革を迫られている。もちろん、本学もまたその例外ではない。この状況を乗り切り、二十一世紀に向けて、いちだんと飛躍することが期待されている。現在は、本学にとっていちばん望ましい大学像は何かを考えることが、本学の構成員のひとりひとりに問われていると言えよう。

将来いつの日か、新たな観点にたった本学の歴史が再び書かれることを期待して擲筆する。

(稲田雅洋・渡辺雅司)

一九九九年十月一日